

司会 第1部の報告者の方々に対するご質問もいただいています。まずガルトゥング先生にいくつか問題にお答えいただいて、それから池澤先生にも1点お答えをお願いしたいものがございます。そのあとさらに全体に対する質問、ご要望等も届いておりますので、午前中の部と合わせてお答えさせていただいていくというかたちで、まずは進めてさせていただきます。

今日は「人間の安全保障」に関してたくさんの論点があり、そもそも「人間の安全保障」は否定的な面もあるけれども、そのまま簡単に受け入れていい枠組みなのか、という問題提起もいただいています。前のほうに本日の講演者の方々にも並んでいただきましたが、時間がなくて、もっとこういう話をしたかったという方もいらっしゃると思いますので、適宜そうしたご意見もお話しいただくというかたちで進めさせていただきます。

ガルトゥング先生に対しては、英文で直接書いていただいたものもあります。それはいまお渡ししていますが、これ以外のものも私からまず紹介させていただいたあと、ガルトゥング先生にお渡ししたいと思います。

まずガルトゥング先生に日本語でいただいた、一つ目です。「ベーシック・ヒューマン・ニーズで四つのポイントの中の「アイデンティティ」という点で、「私は一体何なのか」という問いの答えを持っていることが、人間が存在する上で必要なものだと思います。これについてどう思われますか」。要するにベーシック・ヒューマン・ニーズの四つ目のポイント、「アイデンティティ」についてももう少しお話しいただければということです。

それから二つ目です。「ガルトゥング先生には大変興味深いお話をありがとうございました。地域研究にとって深層文化が重要であるとのお話に共鳴いたします。これまで先生の国際政治学会でのご講演、『ガルトゥング平和学入門』等、勉強させていただきましたが、本日お話しいただいた深層文化を把握する方法について、もう少しお教えいただけますと幸いです」。深層文化について把握する方法をご提言いただければということです。

それから三つ目は、「パレスチナ・イスラエル問題、クルド問題、イラク問題のいずれにおいても連邦制・連合体構想が具体化すると、民族が混住しているところで、新たな境目をつくる必要があると思いますが、その点に関して先生のご意見をうかがいたい」。

これは順にそちらにお持ちして、お答えいただきたいと思いますが、その前にすでにそちらにお渡ししている英文の質問が2点ほどありますので、そちらから順次お答えいただければ幸いです。

ガルトゥング とてもいいご質問をたくさんいただきまして、ありがとうございます。まず飯塚先生が読んでくださった第一の、ベーシック・ヒューマン・ニーズ(人間の基本的必要)からお答えしたいと思います。

まず人間というものは、物理的な意味での体、心、それから精神です。日本語ではどれも「精神」になってしまうのですが、英語で言う場合の mind と spirit に分けて考えると、body、mind、spirit という要素から成ったものが人です。人間の存在は個としての人と、それから環境との狭間で生きていくものだと思います。

一つの方法としては、人間の体のうち、オープンなところに目をつけてみたらどうかと思います。たとえば目や口は開いていますが(この目や口です)、目はものの印象を受けます。それに対して口は何かを言うわけですから、外に向かって表現するというとらえ方ができます。

ここでニーズと関係してきますが、たとえば表現の必要、あるいは印象の必要、それと心の動き、mind との関係がどうなっているかを見るわけです。また口は、ただ物を言うだけではなく、もっと大事なことは食物を食べるということです。同様に口は、喉を通して空気を吸うわけです。人間の肉体的にオープンな部分との関係でベーシック・ヒューマン・ニーズを考えるわけです。

つまり、目で印象を受けるという自由が奪われる、あるいは口から食物を摂るという基本的な必要が阻止されるとしたら、もはや人間として存在しなくなってしまうということです。

それからもう一つの方法は、客観的にそうとらえるだけではなく、いろいろな人と話し合ってみるということです。「これ以下では絶対に生きていくことができない、それは何ですか」と会話で聞いてみるわけです。ここでは生存あるいはウェルビーイング well being を超えて、自由あるいはアイデンティティと関係してくるわけです。

ですからお上が、これが基本的に必要だと決定するのではなく、生きている人が自分にとって基本的必要とは何かということをも自分で表現する、それに耳を傾けるといいうことです。それが二つ目の非常に大事な方法です。

たしかにこういうことは宗教的に定義することもできれば、哲学的に定義することもできる。あるいは心理学的に定義することもできます。しかし宗教的、哲学的、あるいはアメリカ流の心理学を使って、人間の基本的必要は何かというものを決めるのではなく、人々に自分がどう思うかと聞くわけです。

私がこういうことを言うと、先生方の中にはマズロー(アブラハム・マズロー、1908-70、アメリカの心理学者)流ではないかと考えておられる方もいらっしゃるでしょう。しかし私が言っているやり方と、マズロー先生のやり方とは根本的に違う点があります。

マズロー先生と私の大きな違いは、彼の場合はベーシック・ニーズというものにヒエラルキーを付けて、何がより大事で、何が低いと決めたわけです。たとえば人間の肉体と関係するベーシック・ニーズは下の段階で、心あるいは精神と関係するものは高いレベルのベーシック・ニーズというふうにされました。つまりマズロー先生流に言えば、まず肉体的な満足を必要充足した上で、より高度な心や精神の必要も充足で

きるとなります。

私はこれは根本的に正しくない、間違っていると思います。世界中の何百万、何千万の人たちが、自分の生命を犠牲にしても自分の言葉を話したい、自分の言語を守りたいと思います。それから自分の宗教のためには死んでもいいという考えを持つでしょうし、またある意味で自分自身の指導者、政治的指導者のためには、どんな犠牲を払ってもいいという発想をするわけです。ですから、ヒエラルキーをつけるのは正しくないと思います。そういう点でこれはアイデンティティを考えるための良い例です。たとえば言語、宗教、それから指導者とのアイデンティティです。

これは世界的に共通する自然の法則でもあると思います。仮に非常に専制的なひどい指導者であったとしても、外国人に統治されるよりは、自分たちの仲間の誰かに統治されたほうがまだましだと、普通は考えられます。

これは自然の法則だと言いましたが、イラクの場合ですと、シーア派の人、それからクルドの人たちもやはりそう思うでしょう。それからアフガニスタンのウズベク系の人々についても同じことが言えると思います。

たとえばアフガニスタンで、いまパシュトゥーンのカルザイさんが統治していますが、ウズベク系の人たち、あるいはほかの民族の人たちにとっては、パシュトゥーンに支配されたくないということです。私が言うところのベーシック・ニーズは、どれも根本的に同等のベーシック・ニーズで、大事さは全部同じです。それなしでは人間として生きていけない。そういう点でのベーシック・ニーズです。

それでは次のご質問の深層文化です。これは心理学がいうところの、個人の人間のいろいろなパーソナリティ、性格に相当するものを、集団の場合にあてはめたものといえると思います。たとえば日本人という集団のパーソナリティが深層文化であるといえます。

たとえば私たちの性格を知る上で、私たちの深層文化に相当するものを知るために、フロイト流のやり方で夢を通して潜在意識を分析することができます。それではフロイトの夢に相当する、集団としての、たとえば日本の民族としての集団の夢はどうやって把握することができるのか、しかもそれをどうやって分析できるのかが問題です。

これはどういうところに表れるかという、民族が持っている神話の一つです。それからみんなが愛している歌の中にどういうものが表れているか。たとえば国歌、日本で言えば文部省のようなところが決めるカリキュラムにも表れます。また公園などにある銅像にも表れます。それから道の名前の付け方にも、集団としての夢というか深層文化が表れています。

たとえばフランスの、ラテンアメリカの、そして日本の道路の名前の付け方を分析することによって、その国の人たちがコンフリクトというものをどうとらえようとしているかが、よく把握できます。深層文化は別の表現を使えば、集団の潜在意識という言い方もできると思います。それが結局、たとえば道路の名前の付け方などに表れ

るわけです。

こういう点で私は地域研究というアプローチに疑問があるというか、一言コメントしたいと思います。地域研究というのは多くの場合、地理的に地域を分ける。つまり世界をそういうふうに分けて、その地域間の関係、横の連携、つながりというものを見落としがちです。そこに問題があると思います。

私がプリンストン大学の教授のときに、イラン学者の会議に呼ばれて、イランに行ったことがあります。そこで出てきたのはイラン地域専門家の先生方がおられました。2日間の会議の間中、USという言葉が一度として使われたことがなかったわけです。ですからこれはオーストリッチが頭を砂の中に隠しているようなもので、全体像がとらえられていない、いい証拠だと思います。

三つ目の質問ですが、連邦制、フェデラリズムのアプローチです。これは今日はあまり深く申し上げられませんでしたし、これにも欠点があることは私も十分承知しています。ことに中東に関してです。しかし欠点はありますが、それはイラクのような非常に複雑で、しかも多民族的な地域に対して統一国家の形態を押しつける欠点に比べれば、はるかにましなのです。

たとえば日本は典型的な単一民族国家、ユニタリー・ステートではありますが、日本の中にもいくつかの他民族はいるわけです。たとえばアイヌあるいは琉球の人たちにもっと自治権を与えたら、日本という国のありさまはもっと良いものになるだろうと思います。

そういう点ではソ連は文化的な自治権を与えましたが、政治的・経済的独自性を許しませんでした。

連邦制として成功している例はエチオピアです。エチオピアはハイレ・セラシェの当時は単一国家的な形態で、独裁的な厳しい国でした。これはハイレ・セラシェの下では、ダグという言葉があるそうですが、コミュニストという意味でのコミッティの独裁政権でした。

1994年にエチオピアは連邦制をとるようになりました。これは12の部分から成る連邦です。彼らには60くらいの言語がありますが、その60の言語を絞って12くらいにして、その12の部分からなる連邦制をとったわけです。

1994年以来、ハイレ・セラシェの統治下、あるいは共産政権の統治下で行われたような、暴力的な闘争は一度も起こっていません。もちろん暴力状況がまったくない、闘争が何も無いと言っているわけではありません。しかし60が12に絞られて、ほかの認められていない部族間の戦いはありましたが、その暴力状況は前に比べれば非常に減りました。

先ほどから何度も申しましたように、どうやってこういう結論に達するか。それは人々に、何を求めているのか、何がゴールなのかを聞いてみるわけです。彼らの答えは、自分たちの同族に支配されたい、たとえば同じ言語を話す人たちに統治されたい

という答えが出てきます。

たとえばエチオピアの北西部、アスマラあたりに行って、その人たちに聞いてみる。彼らから見たら、アディスアベバは外国的な発想で異質だという意識が非常に強いわけです。たとえば琉球に行かれて、琉球の人たちに何を求めているかを聞いてみます。彼らは 1879 年に日本に征服された以前のことを考えていると思います。

次に英語のご質問ですが、「アメリカのイラクにおける神がかった目標は一体どうしますか」というものです。これはもちろん非正当な目標です。ブッシュの目標は中東におけるイスラエルの安全を保障することです。これはたしかに正当な目標ですが、だからといってイラク人 3 万人の犠牲の下にそれを達成するのは、非正当な目標です。この短い期間に 3 万人のイラク人が殺されたことになっていますが、一人ひとりの死者の背後には、それを悲しむ 10 人の遺族がいます。つまり 30 万人がアメリカを憎んでいます。そういう憎しみは必ず返ってくるということです。

これには打開策があるのかなのかというと、あります。打開策は和解です。そのちょうどいい例がドイツです。ドイツはかつて占領した 18 カ国、それから虐殺しようとした二つの民族、ですからある意味では 20 の交渉相手に対して和解を成功させています。それがいい手本になります。日本はまだそれができていません。

「安全保障」自体は何ら間違っていないと思います。非常に大事なことです。これを目標にするのはいいけれども、そのやり方が問題です。そこで、第二次世界大戦後、西ヨーロッパがヨーロッパでやったことが、中東の平和のいいお手本になると思います。

パレスチナ人を死に追いつめたり、あるいはパレスチナを占領したりすることによって、安全保障は絶対に獲得できません。それはより多くの死、より多くの戦争を生むばかりです。ブッシュの提案されたロードマップは、たしかに道はありますが、この道は平和につながる道ではなく、結局ぐるぐる回りである。そのぐるぐる回りをやっている最中に、結局、自分で自分のしっぽを噛むようなことになるわけです。

もう一つ質問がありますが、これは大変良いご質問です。特にブッシュとの関係で、日本やわが国ノルウェーをより独立国家にするにはどうしたらいいかということです。日本政府もノルウェー政府もできることは限られていて、大したことはできません。やはり彼らはアメリカを恐れているので、可能性はあまりありません。

おそらく先生方は皆ご存じだと思いますが、一度アメリカの子分になったら、そこで反抗をした場合には、ひどい目に遭います。歴史はこのことをはっきり証明しています。たとえばサダム・フセインはアメリカの本当に良い仲間であったわけです。それからポル・ポトもソマリアのアイディードもそうだった。ひとたび反抗すると、どんな目に遭うか。これはよく証明されています。

ですから日本政府もノルウェー政府も大したことはできない。これははっきりわかっています。しかし日本の市民そしてノルウェーの市民の側はできることが多くあるはずで、たとえばコカ・コーラを飲まなくてははいけないという決まりはないわけで、

この素晴らしい日本のサントリー天然水を飲んだら良いのです。たとえばマクドナルドのハンバーガーを食べなければいけないとか、スターバックスのコーヒーを飲まなくてはならないという法律もないわけです。

皆さんがもしコカ・コーラの中毒だったら、コカ・コーラをやめて、いまは22カ国でメッカ・コーラが出ているそうですが、まがい物ですけども、そちらに切り替えることもできます。ディーラーにこっちへ切り替えてくださいと申し入れて、そこから出た収益の一部は、たとえばパレスチナに寄付する。でももし皆さんがアメリカの帝国主義を支持したいのなら、どうぞ引き続いてコカ・コーラをお飲みいただきたいと思います。

皆さんに選択の余地があるなら、たとえばボーイング製の飛行機に乗らない。それを使っている航空会社はボイコットするということです。なぜかというボーイング社は世界最大の「死」製造工場です。これはアウシュビッツの比ではありません。もちろんそのうちの一つの飛行機B29が日本で何をやったかは、皆さんご存じだと思います。これがボーイングです。ある国（米国）の大使館がこの近くにありますが、スミソニアン航空宇宙博物館でエノラゲイの展示をやるというのは、ダハウやアウシュビッツでガスチェンバーの展示をやるような無神経さです。

それからもし皆さんが外国旅行される場合には、ドルはいま毎日少しずつ値打ちが下がっているので、その点でも持っていけないほうがいいと思います。ドルを外貨として使わないで、たとえばユーロ建てを使うとか、円を使うという、ボイコットの仕方もあると思います。

もう一つ言えるのは、アメリカの戦費をいちばん多く負担しているというか、無意識のうちにやっているのですが、肩入れしているのはある意味では日本や中国の無名、無数の普通の市民です。なぜかという日本政府あるいは中国政府は、アメリカの莫大な国債や公債を買い込んでしまっているからです。

ですからこれに対する答えは、政府を頼りにしないで、市民の側がアメリカ製品のボイコットをする。ことにアメリカの帝国主義的な分野での製品のボイコットです。それと同時にアメリカ文化と協力していく、あるいはアメリカ市民と手を結んでいくということです。それと絶対に忘れてはいけないのは、ガンジーの非常に大きなポイントでもあります、アメリカ市民との対話です。それをベースにして、こういう行動をとるということです。

つまりここで何度も申し上げたいのは、反米、反アメリカの運動を言っているわけではなく、反アメリカ帝国主義というか、アメリカ政府の政策に反対する行動を言っているわけです。ですから私たちがアメリカの市民と協力して、アメリカ市民がアメリカの帝国主義的な行動から解放されるような手伝いを共に協力してやるということです。

これは政府としては非常に難しいことです。歴史上、ひとたびアメリカの子分にな

っていたのに反旗を翻したらどんな目に遭うかは、皆さんよくご存じだと思います。ですから日本の場合は日本政府を頼りにすることはできない。できることは限られてしまっています。ひとたび反旗を翻すと、シラクにしてもシュレーダーにしても、まるで悪魔視されてしまう。ですから小泉さんもひとたびアメリカに反旗を翻したら、彼も悪魔にされてしまうわけです。政府があまりできないから、市民の側がやらなくてはいけない。

これは何も私一人が言っているわけではなく、たとえばマイクロソフトの代わりにリナックスを使うと、世界中のいろいろな人が言っています。実はアメリカ政府当局がいちばん恐れているのは、世界の市民が手を組んで行動をとることであって、テロリストではないのです。つまり非常に暴力的なテロリストに対してはより大きい暴力で対抗できるわけですから、むしろ歓迎している側面があります。しかし市民側の非暴力的な行動を彼らはいちばん恐れています。

これはある意味では市場の力、マーケットの力を私たちの手に取り戻すことです。それで自分たちでこれは欲しくない、これはボイコットすると、市場の力を逆手にとっているわけです。ですからアメリカは巨人ではあるけれども、脆弱性を持った巨人であるということです。

司会 よろしいでしょうか。ガルトゥング先生、どうもありがとうございました。実はガルトゥング先生は今回のシンポジウムのために、当初は今日1日の日帰りということでオーストラリアからおいでになって、終わったらすぐにオーストラリアにお帰りになるので成田へ直行というご予定でした。それを何とか今晚一泊していただけるようなかたちになりました。今朝オーストラリアからお着きになって、明日にはお帰りになるという、本当にこのシンポジウムのためだけにお越しいただいていますので、こういうふうにご質問をたくさんいただきまして、主催者としても大変よかったですと思っています。

それでは時間も押してまいりましたので、続いて池澤夏樹先生をお願いします。これは「池澤先生がお話の中で言及された『大きな預かりもの』、地域研究者は同じようなものをみんな持っているのではないか」。地域研究のほうでは、「そういうものをどうするのか」というのを島田先生に対してご指名でご質問が届いています。一方で池澤先生にも「この関連でどういうふうに伝えるのか」ということで質問が届いていますので、ご回答をお願いします。

池澤 「地域研究者は、池澤さんのおっしゃった大事な荷物をたくさん持とうと日々努力していると思います。このような大事な荷物である『現地の知』を、どのようにしてそれを直接得ることのできない人々に伝えていけるのでしょうか」というのが趣旨です。

これはどこまで伝えたら伝えたことになるかというのは難しいけれども、でも伝える手段は皆さんお持ちだと思います。雑誌に書く、サイトをつくる、世間に向かって

啓蒙する手段は、ないわけではない。僕はもともと旅行好きもありまして地域研究が好きで、そういう関係の本をこれまでにずいぶん読んできました。

沖縄に戻ったらすぐに、松田素二さんという京都大学の先生の『ケニアの都市社会学』の本を書評すべく、丹念に読むつもりでいます。ですから本になっていけば、人は読みます。少なくとも関心を持っている人は読みます。雑誌だって読みます。インターネットもあります。だから人が受け取るかどうかはまた別ですが、発信はいつでもしていける。その意味では日本はまだよい状況にあると思います。

ただ受け取るかどうかは別というのは、僕に言わせれば日本人は格別に海外事情に対する関心の薄い、内向的な人々ですから、困難は多々あります。しかし発信する自由は、われわれのリサーチャーズ・ベーシック・ニーズとして与えられると思いますから、一生懸命やってください。

司会 それでは島田先生が少しお時間をとということであれば、別の質問について簡単にご紹介します。実際にはいろいろと個別のものがありまして、たとえば松林先生には「2000年に高知県の医療費が突然低下したのはなぜですか」。それからさらにより大きな問題としては、「地域研究というものについて今日は語られなかったので、地域研究についてもう少し何か語っていただきたい」というのもありました。

これはあまりにもテーマが大きすぎます。昨日、地域研究とは何かというワークショップを4時間くらいやったと思いますが、それでもなかなかまとまりが出ないような問題でした。ですから今日のところはプログラムにも書いてありますように、「いま『現地』に立ちもどって考える」ということです。今日は「人間の安全保障」をそういうかたちで考えたいということで、それを地域研究の一つの特性として出したということで、ご了承いただければと思います。

あと2点ほどご質問があります。これに関連しては、どなたにというわけではありません。ですから話し足りなかったことも含めて、前に8人のパネラーの方に並んでいただいていますので、お答えいただければと思います。

1点は、「『人間の安全保障』への日本のかかわり方は今後どうなっていくのか。たとえばODAの変化、緒方貞子さんのJICA代表就任などを通じて、どう変わっていくのかということについて、何か」ということです。「人間の安全保障」を緒方貞子さんもおっしゃっているわけで、ODAも含めて、これがどういう影響を与えているのかということで質問が届いています。どなたかお答えいただける方がいらっしゃれば、それに絡めてさらにということでも結構です。

それから最後は、基本的にこのプロジェクトの代表ということになっている黒木英充先生にお答えいただくしかないと思います。しかもなおかつこの質問に対して簡単に答えられれば、昨日今日発足したばかりのこのプロジェクトはもう終わっていいという感じです。「『人間の安全保障学』が構築されるとしたら、その全体像は結局、どうなるのでしょうか」。(笑)これから構築しようと思っているので、全体像が見えて

いれば構築の努力はいたしませんという回答しか出ないかもしれませんが、これは黒木さんをお願いしたいと思います。

これを最後にしていただくとして、島田先生、それからいまの日本の「人間の安全保障」の問題も含めて、どなたか何かあればということです。

それからガルトゥング先生から、たとえば地域研究者の問題と言われましたが、幸いにして本日のシンポジウムでは、ラテンアメリカとアメリカの関係から始まって、とにかく常に関係性の中で地域をとらえる、ということもやってきました。そういうふうにならわればはやっています、ということも含めてご意見がおありの方は、パネルのほうでご意見をいただければと思います。

まず島田先生からお願いします。

島田 池澤先生もおっしゃったように、私たちも職業としていろいろな論文を書いたり、あるいは個人的に努力しているのは、こういう会やほかのシンポジウムに招かれたら、時間のある限りなるべく出て行って発言をするというのがせいぜいです。もう一つは、僕らは荷物というか、課題を請け負ってしまうわけですが、その多くの課題というのは、実は僕ら自身が投げているということが常に出てくるものですから、ものすごく重いのです。

今回、追放の事例を一つお話ししたのですが、実は追放になったきっかけというのは、僕ら自身のある意味で善意みたいなものです。村の小学校の屋根が台風で吹き飛んで、そのためにお金を少し寄付する。寄付するときには、私はその村に関しては数年にわたって関与していますから、間違いのないようにしています。地域研究者の鏡として正しい方法で、NGOの人でも、政府はもちろんできないような方法で、つつがなく事が進むようにと思って、すごく考えて渡します。その渡した方が思ったようには動かなかった。そして結局、ああいう事件が起きたのです。

NGOの話も少し出しましたが、あのNGOは自分自身でもある、ということが常に自覚としてあります。そういう問題を事あるごとに話しているつもりですが、それを直接どういう具合にみんなに伝えるか。「現地の知」と言うとなかなか白々しくなってしまう、そんなものではなくても、私自身も完全にやり込められてしまっている。ですから私は日本でも組織の中でいろいろな問題を起こしていると思いますが、それと同じレベルで向こうでも問題を起こしている。その範囲で、帰ってきたら伝える手段を持って伝えたいと思っています。

池澤先生が言われたように、私たちが何か発言しても、アフリカの一つの村で起きたことといった話は、実はスポッと終わってしまうわけですね。今日は私はかなり背伸びをして、一般化した話をしました。そういう点でなかなか伝わらない、石を投げてもらえないというもどかしさもあります。

今日は非常に大きな話からミクロの私たちの話までつながって、その点では荷物の一部は下ろせたのかという感じがします。以上です。

司会 ありがとうございます。ほかのパネラーの皆さんはいかがでしょう。本日はいろいろなテーマを提起していただきました。松里先生、池澤先生は重なった部分もあるかと思いますが、「人間の安全保障」とかかっている人権のメディアの外側からのコントロールというか、誤解の問題というのもありました。

それから島田先生からは、もともとアフリカの「人間の安全保障」というところからいかないといけない。先進国の安全のためではないだろう、とか、さらに松林先生からも、幸福というのは医療の先にあるというかたちで、この問題を語っていただいたり、いろいろな論点が出ていました。これを議論する時間はありませんが、私がほんの少しだけまとめさせていただいたのも含めて、パネラーの方、ご発言はよろしいでしょうか。

パネラーの方がご不満でなければ、フロアのほうから、先ほどのガルトゥング先生、池澤先生、島田先生のご回答も含めて、何かまたコメントをお持ちの方がいらっしゃれば、お一人もしくはお二人くらいかと思いますが、挙手をいただければと思います。いかがでしょうか。よろしいですか。

では、第2部のイラク戦争下の「人間の安全保障」という問題に関しては、日本においてイラク地域研究の第一人者である酒井啓子さんが会場にいらっしゃるのので、1分か2分程度の時間で何かコメントをいただければお願いします。

酒井 いきなりふられたので、気の利いたことを言えと言われても大変難しいのですが、今日のお話は大変参考になりました。特に池澤先生のお話は大変重い、まさにこの状況に対して何もできない自分の痛みというものを、とにかく自覚するところから始めなければいけないというところは、本当にそうだと思います。ただ地域研究者として、大変地道ではあるけれども、そこからいかに正確な図を出していくか、発信していくかというところが重要になってきます。

先ほどガルトゥング先生は、今後イラクはこういったことを中心に見ていかなければいけないというポイントをいくつかあげられましたが、その中にそれぞれ関与している交渉相手、勢力を正確に認識して見ていかなければいけないというご指摘がありました。たとえばその交渉相手、勢力とは何か。日々刻々と変わっていく現地の人々の主体、アイデンティティです。

たとえばガルトゥング先生のお話にあった、私たちは私たちの仲間に統治してほしいと言ったときの、「私たち」というのは一体誰なのか、というのはおそらく毎日変わっていきます。そういったところを地域研究者がいかに正確に提示できるのかというところは、われわれに投げられた課題です。

しかし非常に腹立たしいことに、たとえば今日言ったことが3日後には状況が変わってしまっている。そのことに対して、これはマスコミの方々にお願いしたいのですが、変わってしまった状況を新たに追加で報告するのではなく、昔言った発言がそのままずっと固定化されるようなかたちで、逆に間違った情報が蔓延してしまうことも

起こるわけです。どんどん書いて、どんどん発信していく必要があると同時に、それをいかに正確なものに近いものにしていくかというのは、大変大きな課題だと思います。

別にイラク研究者だからという発言ではなくて申し訳ないのですが、感想めいたことで失礼いたしました。

司会 ありがとうございます。

それから臼杵陽先生は本日のご紹介で、国立民族学博物館地域研究企画交流センター教授と申し上げましたが、同時に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の併任教授でもいらっしゃいます。

ちなみにその関係で言いますと、帯谷知可先生も国立民族学博物館地域研究企画交流センターの助教授であると同時に、北海道大学スラブ研究センターの併任助教授でもいらっしゃいます。

臼杵先生、どうぞ。

臼杵 私は一言言い忘れたことがあります。パレスチナ問題をアラビア語で言うと、「アル・カディーヤトゥ・ル・フィラスティーニーヤ」と言います。「カディーヤ」というのは「大義」です。つまり単なる問題ではない。つまりいま正義が実現されていないというのが、パレスチナ人の意識です。彼らがいちばん苛立っているのは何かというと、別にお金が欲しいわけではないし、援助してくれということでもありません。つまり世界が沈黙していることに対して怒っている。このへんは何度も繰り返し言わなければなりません。

もう一点、私はガルトゥング先生とは反対の意見があります。それは連邦制で中東問題は解決しない。なぜならイスラエルというのは、アジアにおける日本と同じです。つまりもし連邦制をつくってしまうと、完全に中東はイスラエルの経済的支配下に入る。それは絶対に実現できないことだと思います。

だからその問題は非常に重要な点で、いままでなぜ連邦制が失敗したかというのは、イスラエルの圧倒的な力がある。それはアメリカが支えているということが問題であって、政治的な枠組みだけではなく、経済的な問題が歴然としているということです。この2点です。

司会 主催者のほうからはもう10分、5時半までは延ばしてもいいという話がありますので、ガルトゥング先生のほうで反論がおありでしたら、5分程度でいただいてもよろしいですが、特にありませんか。

ガルトゥング イスラエルとパレスチナの関係に関しては、コンフェデレーション、国家連合という関係を提案しているわけです。ただ中東のコミュニティという点で、イスラエルとパレスチナを含んだ共同体を提案して、そういう点でのフェデレーションです。6カ国が一緒になった共同体であれば、その中でイスラエルもパレスチナもやっつけられるわけですが、ただ二者だけのフェデレーションではうまくいかないだろう

うということです。

司会 いま申し上げましたように5時半までということで、あと14分くらいは余裕ができましたが、最後にご挨拶もありますので、あとお一方、もしご遠慮なさっているということではなければいいのですけれども、よろしいでしょうか。

よろしければ、先ほどの「『人間の安全保障学』が構築されるとしたら、その全体像は」というご質問に対して、このプロジェクトのリーダーであります黒木英充氏からご回答いただきたいと思います。

黒木 非常に重い質問です。よく設計図もなしに家をつくってどうする、という言葉がありますが、設計図はほとんどない状況です。「学として構築する」と一応私もそういう風呂敷を広げてみましたが、そういった試みは他の研究機関でも、教育機関でもあります。

来年度から東京大学大学院の総合文化研究科では「人間の安全保障」に関する専攻コースができます。私どもが属している東京外国語大学では、「紛争予防、平和構築」というコースが新たにできます。ほかにもいろいろあると思います。そういったところでは先生方が授業科目の構成をどうするかといったところで、そういった問題を現実と考えていらっしゃると思います。

私どもはこれを研究プロジェクトとしてやっていますので、もう少しゆったり構えていられるのかもしれませんが、今日皆さんにいろいろお話しいただきましたが、「人間の安全保障」は非常に振幅があるということが明らかになったと思います。戦争のような非常に重い課題から、もう一方の極では、こういったかたちでこれだけのことをしたらこの村の医療がこれだけよくなったというところまで、いろいろな幅を持って揺れ動いているものだということが、おわかりいただけたと思います。そしてまた揺れ動くがゆえに、非常に慎重にならなければいけない局面もあります。

そういったものを掲げてわれわれ研究者が走り出しているわけですが、そういったときにそれが将来、「人間の安全保障学」という一冊の教科書に収斂するのか、あるいはもっと分散したものになるのか。どちらがいいのか、私もよくわかりません。

ただ次のようなことは言えると思います。最初に申しましたように、本来ですと私は18~19世紀の歴史文書を文書館にこもって読んでいるような者でありまして、そういった者が全然、場違いな問題をやっているように見えると思います。

ところが今日のお話をうかがって非常に触発されますのは、100年前、200年前、300年前のことが、現在にずっと通じているというのを感じることがあります。たとえば暴力の問題、それからその暴力をどのように社会がとらえているか。そういった文化的な文脈というものが、200年前、300年前の事件の中に、驚くほど現在と似ているものが出てくることがあります。

そういった問題は、ガルトゥング先生がおっしゃった「ディープ・カルチャー」に近いものがあるかもしれませんが、そういったことを気づかせてくれます。それがま

たほかの医学、生態学、人類学、経済学といった分野の方々がやっていらっしゃる仕事と、ある面でものすごく重なりあってくる。これがわれわれ研究者の研究の幅を広げていくことになって、われわれ自身の仕事の内容にもフィードバックされてくると思います。その先におそらく何かが出てくるかもしれません。その明確な地図は、まだ私の中にははっきりできていません。

繰り返しになりますが、いろいろな方法論の研究者が集まって、そしていまだに揺れ続けている言葉、振幅の大きな言葉ではありますが、しかしそれを何らかのかたちで豊かにし、そこに新たな価値を付与して、社会にそれを投げ返していく。それができれば、そのときに「人間の安全保障」が学として一步前進したと言えるのでは、と考えます。私のこの考えに関しては反論の先生も多いかもしれませんが、とりあえず現在の考えです。

司会 何度も申し上げますが、つい最近、発足したプロジェクトでございます。本日もかなり問題が出てきましたが、そもそも「人間の安全保障」というのはこの概念でいくのがいいのか。問題があるにもかかわらず、この概念でいくのか、それともこの概念はやめたほうがいいのかということです。

そういったことも含めて、かなり流動的に人が出たり入ったりするかたちのプロジェクトですが、本日のシンポジウムの中でいろいろな論点、ご意見、ご示唆をいただきましたので、この中でこれから少しずつ「人間の安全保障学」の構築を目指して進んでいくということです。いまの黒木さんの意見に対していろいろ反論等もおありかと思いますが、この段階ではこれからそれを議論していくということで収めさせていただきたいと思います。

今回のシンポジウムに関しましては、地域研究コンソーシアム設立準備委員会、および東京外国語大学から共催をいただいています。資金的な援助もいただいています。この両者にかかわっている東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の所長、宮崎恒二より一言ご挨拶を申し上げます。

宮崎 ご紹介いただきました、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の宮崎でございます。共催になっております二つの組織をまとめて一人で、ということで、ご挨拶をさせていただきます。

本日は講演者の方々、パネラーの方々、それからフロアの方々、参加者の方々、どうもありがとうございました。「人間の安全保障学」の構築プロジェクトは、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所のプロジェクトの一つとして始まったばかりです。

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所は通称 A A 研と申していますが、これまでは言語文化を主体として、歴史も組み込んだかたちで非常に広範に研究プロジェクトを進めてまいりました。このプロジェクトが学術的な香りがしないと言うわけではありませんが、いわば学問的、学術的な香りのするような、わりあいに狭い範

囲でのプロジェクトをやってきました。しかし新たな試みとして「人間の安全保障学」を始めることができて、研究所としても注目しているわけです。

研究所が属している東京外国語大学は地域文化研究科という大学院を持っていて、こちらでもこれにやや性格の近い教育プログラムを始めようとしています。そういう面でこのプロジェクトの発展を見込めるのではないかと考えています。

それから東京外国語大学は100年くらいの歴史を持つわけですが、共催のもう一方の委員会である地域研究コンソーシアム設立準備委員会は、昨日発足したばかりです。まだ1日しか経過していません。

今日の午前中のパネルでおそらく皆さんもお気づきになったり、あるいはすでにご存じのことと思いますが、世界各地のいろいろな地域研究に携わっている方は結構多いわけです。それは相当な成果を上げておられます。今日の活発なお話の中から、それは明らかだとお感じになったと思います。

しかしこれまでそれを総体的にまとめる場がありませんでした。日本の研究機関でもアジア・アフリカ言語文化研究所だけではなく、地域研究企画交流センター、東南アジア研究センター、スラブ研究センター等々、地域研究にかかわる組織はずいぶんあります。しかしその間のコーディネーションがこれまであまりなかったわけです。

しかしこのように新たなプロジェクトを始めたり、あるいは池澤先生もおっしゃいましたが、発信していく上において組織的な努力をすることは必要だろうし、ぜひそれをやっていこうという機運が高まってきました。そういう意味で関連する機関を束ねるかたちでコンソーシアムをつくり、そこで新たな活動を開始していこうということです。

なお地域研究ということについて、ガルトウング先生は若干の疑念を表明されました。しかしこれは、ある地域の専門家がその専門家ばかりで集まって何かするというようなコンソーシアムにはしない。むしろいろいろな地域にかかわった方々、それからその地域で研究された方々が地域横断的なかたちで集まって、新たな問題・視覚の発見や、データの集積などをやっていきたいというのが趣旨です。したがってこれまでの狭い意味での地域研究ではなく、もう少し広がりのある地域研究をもって発信や新たな方向の開拓に努めていこうというわけです。

まだ1日の歴史しかありませんが、今後早急に体制を整えながら事業を展開していきたいと思っています。「人間の安全保障学」も地域研究コンソーシアムの活動と密接につながってきます。このプロジェクト、それから地域研究コンソーシアムについても、皆さんには今後その活動にご注目いただきたいとお願い申し上げます。

本日は、講演者の方々から非常に明晰、かつ重々しいお話をいただきましたし、パネラーの方々には活発なご議論をいただきました。またフロアの方々からは熱気の溢れてくるような質問もいただきました。共催者を代表して一言お礼の言葉と代えさせていただきます。どうもありがとうございました。(拍手)